



Data

監督：篠原哲雄
 原作：池上司『雷撃深度一九・五』
 （文春文庫刊）
 映画化原作：『真夏のオリオン』福
 井晴敏・監修・飯田健三郎・
 著（小学館文庫刊）
 監修・脚色：福井晴敏
 出演：玉木宏 / 北川景子 / 堂珍嘉邦
 / 平岡祐太 / 吉田栄作 / 益
 岡徹 / 吹越 満 / 黄川田将也
 / 太賀 / 鈴木瑞穂 / 鈴木拓
 / デイビッド・ウィニング

みどころ

歴史的名作『U・ボート』（81年）と『眼下の敵』（57年）をミックスした潜水艦ものの現代的名作が登場！息詰まる戦いのサマと男たちの息づかいを熱く感じとりたい。藤井フミヤが歌った名曲『Another Orion』と共通するタイトルにも注目！「愛するものを導け」とメッセージされた、哀しくも切ないメロディが織りなす物語と日米の絆とは？また、クライマックスのあっと驚くアイデアとは？『男たちの大和』（05年）に続いて、若者たちは本作から何を感じ、何を学ぶ？

近時の戦争モノ、潜水艦モノあれこれ

邦画の近時の戦争モノの代表作は、思いがけず(?)大ヒットした『男たちの大和』（05年）(『シネマルーム9』24頁参照)と『亡国のイージス』（05年）(『シネマルーム8』352頁参照)。そして潜水艦モノの代表作は、私が星5つをつけた『ローレライ』（05年）。役所広司が伊507の絹見真一艦長に扮して1945年8月、第3の原爆投下阻止のため「ローレライシステム」を積んでアメリカ占領下のテナン基地に向かったが、さてそのスリリングな展開と結末は？(『シネマルーム7』51頁参照)

他方、回天モノの代表は、『出口のない海』（06年）。これは数々の伝統ある回天モノの現代継承版と期待されたが、残念ながら私の採点は星3つ(『シネマルーム12』223頁参照)。その最大の理由は市川海老蔵がミスキャストだったこと。私の海老蔵批判は1977年生まれの海老蔵がオッサンすぎることに、もって生まれた育ちの良さと体型が回天乗りになりに似合わないこと、エースピッチャーにはフォームが全くサマになっていない

ことだったが・・・。

やっぱり潜水艦の艦長は細身でなくちゃ

終戦直前の1945年8月初旬、沖縄南東海域に配備されていたイ-77潜水艦の艦長倉本孝行を演ずるのは玉木宏。私には『ただ、君を愛してる』(06年)で宮崎あおい、黒木メイサと共演したイメージしか残っていない(『シネマルーム11』269頁参照)が、近々鑑賞予定の『MW』(09年)ではこれまでの好青年のイメージをかなぐり捨てて、エリート銀行員の外観と裏腹に壮大な復讐劇を冷徹に実行していく悪役に挑戦。

その細身な身体がそんなダークヒーロー役にピッタリだが、食糧事情が厳しい中、極限状態での戦いを続けている潜水艦の艦長もやっぱりこれくらいの細身がピッタリ。

なぜ潜水艦乗りに？

私は玉木宏の氏素性を全然知らないが、多分市川海老蔵のような名門のお坊っちゃんではないだろう。そのためか、潜水艦乗りがよく似合っている。軍医長の坪田誠(平岡祐太)からの、海軍軍人なら誰もが戦艦勤務を目指すのに、「なぜ潜水艦乗りになったのか？」との質問に対する倉本の答えは「自由だから」というもの。つまり、戦艦勤務と違い、潜水艦乗りはいったん出撃すれば帰還するまで全て自分の判断で行動しなければならないわけだが、逆にいえばそれだけの自由があるということだ。

なるほど、こんな合理的で明晰な頭脳をもった艦長なら、『ローレイ』における伊507の絹見真一艦長と同じように立派にその任務を果たしてくれるのでは？

『眼下の敵』の現代版が！

潜水艦モノにうるさい私の最高傑作は、ウォルフガング・ペーターゼン監督の『U・ポート』(81年)。また、それに甲乙つけ難いのがアメリカの駆逐艦とドイツのUポートとの一騎討ちを極限状態の中で描いた1957年の名作『眼下の敵』。これらはビデオで何度観ても面白いから不思議。潜水艦と駆逐艦の対決をテーマとした、こんな名作は2度と生まれられないだろうと思っていたが。何と半世紀ぶりにその面白さに匹敵する現代版『眼下の敵』が誕生！

イ-77と対決するのは、マイク・スチュワート艦長(デイビッド・ウィニング)が指揮する駆逐艦パーシバル。駆逐艦は輸送船団の護衛が任務だが、タンカーを何隻も沈められた復讐のためには多少任務を逸脱しても、憎き潜水艦退治のために我慢くらべをしなければ・・・。さまざまは駆け引きを伴う、倉本とマイクとの知恵と知恵の勝負は見モノ。そして、互いに力量を認め合った者同士の敵将に対する尊敬の気持ちも『眼下の敵』と同じで、そんな気持ちがクライマックスのあっと驚く結末で通じ合うことに・・・。

北川景子の敬礼姿に注目！

「あの戦争」を描くには回想シーンから。『男たちの大和』と同じように、本作も回想シーンからスタートする。そのため、超美人女優北川景子が『真夏のオリオン』の作詞作曲者である有沢志津子とその孫娘倉本いずみを1人2役で演じている。もっとも、戦争映画ではヒロインのウエイトが小さくなるのは仕方なし。ただし、出撃していく恋人倉本に楽譜のお守りを渡した後の敬礼姿に注目！この一瞬の演技のために彼女はかなりの稽古をくり返したはずだ。

興味深い乗組員たちのキャラ

本作のストーリー構成がしっかりしているのは、きっと池上司の原作と福井晴敏の映画化原作の両方がしっかりしているため。イ - 8 1の艦長有沢義彦(堂珍嘉邦)との友情と、その妹志津子との恋心を描いた後、スクリーン上はイ - 7 7の艦内に移っていく。

潜水艦モノが面白いのは、密閉された狭い空間内だからこそ明確になる乗組員たちの個性。イ - 7 7の中枢部は機関長の桑田伸作(吉田栄作)、水雷長の田村俊雄(益岡徹)、航海長の中津弘(吹越満)の3人が担っているが、面白いキャラは軍医長の坪田、烹炊長の秋山吾朗(鈴木拓)、回天搭乗員の遠山肇(黄川田将也)たち。そしてまた、「親父が音楽の教師で、いつか私も・・・」と言いながらハーモニカを大切に持っているもっとも若い水雷員の鈴木勝海(太賀)、映画の冒頭、志津子の孫娘倉本いずみがアメリカから届いた手紙と楽譜を持って訪れたのは、現在唯一人生き残っている年老いた鈴木勝海(鈴木瑞穂)という設定だ。

ストーリー構成のバランスの良さに感心

艦長をはじめ各乗組員のキャラが際立ってくるのは、有沢艦長のイ - 8 1をはじめ僚艦からの連絡がすべて途絶えた中、敵駆逐艦との死闘を余儀なくされる中盤の見せ所から。イ - 7 7に残った魚雷はたった1本だけ。しかも今イ - 7 7は安全深度をはるかに超えた海底で、浮上できるかどうかもわからない有り様。さあ、そこで倉本が志津子からの手紙に添えられていたくじらの絵から思いついた起死回生の戦法とは？

本作のストーリーは倉本の友情と恋、艦内の乗組員たちの役割とキャラ、敵駆逐艦との死闘のリアルさ等が実にバランス良く配されているから、見応え十分。これなら、私の息子のような軍事オタクの目にも十分耐えられるのでは・・・？

クライマックスのアイディアに感心

Uボートの苦難の戦いも、駆逐艦VS潜水艦の死闘も必ず決着がつくはず。それは『Uボート』や『眼下の敵』を観ても明らかだが、ホントにそれ以外の決着のつけ方はないの？

誰もがそんなモノはありえないと思うはずだが、そこでコペルニクスの発想の転換をすれば・・・？池上司や福井晴敏がそんなことを考えたのかどうかは知らないが、「死闘に一念のケリがついた段階で、もし終戦の連絡が入ったら・・・」というのが誰もが思いつかないアツと驚くアイデア。もちろん1945年8月という時代に、今のような国際的に通話できる携帯電話があるわけじゃないから、情報が瞬時に駆けめぐりはありえないが、アイデアとしては実に面白い。

倉本艦長が死に場所を求める回天搭乗員の遠山に対して言う、「俺たちは死ぬために戦っているのではない。生きるために戦っているんだ」というセリフは今でこそ理解できるが、あの当時はよほど理性的な頭脳を持った軍人でなければ思いつかない考え方。戦艦大和は片道燃料だけの水上特攻だから、死ぬことは覚悟の上。もちろんその覚悟は倉本艦長以下の乗組員も同じだが、本作にみる奇跡とは？そんなクライマックスのアイデアに、ホトホト感心！

タイトルの意味をしっかりと！

オリオン座とは天の赤道上にあり、おうし座の東にある冬の星座で、中央に三つ星が並んでいるのが目印。大きく明るい星が多いため有名で、ギリシャ神話や小説にもしばしば登場する。1997～1998年頃、私の得意曲の1つとしてカラオケでよく歌っていたのが藤井フミヤの名曲『Another Orion』。「夜空が 夕焼けを包む オリオンを見つけたよ ごらん」で始まるこの曲は、どんなに2人が離れていても、オリオン座が2人を結びつけているという力強いラブソング。しかして、本作のタイトルが意味するものは？

映画全編を通じて核となるストーリーは、志津子が倉本のお守りとして書いて渡した『真夏のオリオン』という曲の楽譜。潜水艦の中で倉本艦長の求めに応じて鈴木水雷員がこれをハーモニカで吹くわけだが、心にしみるこの名曲が、その後日米を股にかけて与えた影響とは？また、イ-77の艦橋で倉本と軍医長坪田が語るシーンや、死闘を終えた駆逐艦パーシバルと浮上したイ-77の艦上から見上げるシーンで真夏のオリオン座が印象強く登場する。

志津子がこの曲に添えたイタリア語の言葉は「オリオンよ、愛する人を導け」というものだが、さてそんな哀しくも切ないメッセージは終戦から60余年を経た今、どんな形で誰に届くのだろうか？

2009（平成21）年5月2日記



「真夏のオリオン」

(13日からT O H Oシネマズ梅田ほかで公開)

新たに「潜水艦モノ」の傑作が!

潜水艦モノのベスト1は『U・ボート』(1981年)。華々しい戦果の裏で描かれる、密室内の極限の人間ドラマと悲しい結果とは? 他方、潜水艦VS駆逐艦モノのベスト1は『眼下の敵』(57年)。知謀と忍耐の限りを尽くした艦長同士の攻防戦は感動的だった。そんな両者の面白さを備えた潜水艦モノの傑

作が、第3の原爆投下阻止に向かう伊507を描いた『ローライ』(2005年に続く本作だ。敗色濃い1945年8月初旬。僚艦と共に最後の防衛ラインに展開するI-77の艦長、倉本少佐(玉木宏)のお守りは、戦友の妹有沢志津子(北川景子)作曲の「真夏のオリオン」。「オリオンよ、愛する人を導け」と

雷かれたその乗譜は、60余年の歳月を経ていかなる人間ドラマに? 駆逐艦は輸送船団の護衛が任務だが、ステュワート艦長はそれを逸脱してまでI-77との対決。我儘比べを決断。こうなると、海中でじつと爆雷攻撃に耐えるだけの潜水艦は分が悪い。海底に沈んでしまったI-77の浮上は? たった一本残った

想定外。回天搭乗員に対する倉本の「俺たちは死ぬためではなく生きるために戦っているんだ」の言葉が、こんな形で実を結ぶ展開に感服。藤井フミヤの96年の大ヒット曲「Another Orion」と対比しながら、「あの戦争」を考え、こんな生きざまを示した日本人がいたことを心に刻みたい。

た魚雷による反撃は?

本作は倉本の友情と恋リアルな死闘、その中で明かされる乗組員たちのキャラと役割がバランス良く配置されているのが特徴。そして面白い小道具は、最年少の水雷兵が吹くハーモニカ。息を潜めるのが宿命の潜水艦でそれはいかなる役割を? 他方、百戦錬磨の敵艦長を欺く「くじらの子供作戦」が秀逸なら、あつと驚く15日! 終戦の日を訪れるクライマックスは

大阪日日新聞 2009(平成21)年6月6日